



【1】 一種研開催報告

一種研が3月16日、17日の2日間、富山県民会館を現地会場とするハイブリッド形態で開催されました（写真1）。今回は、A・P研チュートリアル講演、IEEE AP-S Nagoya Chapter特別講演、A・P研フレッシュドクターセッション2件を含め19件の講演がありました。

A・P研チュートリアル講演では、日本工業大学の竹村暢康先生よりUWBアンテナについて講演いただきました。超広帯域アンテナの歴史から始まり、広帯域にわたる整合方法、MIMOアンテナへの応用など、3.1~10.6GHzのUWB全帯域をカバーするUWBプリントアンテナの小形化手法について解説いただきました。

Nagoya Chapter特別講演では、岐阜大学の関根敏和先生より、最近の回路シミュレータで用いられている回路解析手法、電源を含む多ポート回路の等価回路表現および部分測定や間接測定によるSパラメータ推定法について解説いただきました。多ポート回路の解析はアレーアンテナのアクティブインピーダンスの解析につながるお話でした（写真2）。

フレッシュドクターセッションでは、この春に博士の学位を取得される、防衛大学のフンクワンクワンさん、および東北大学のChangyu Zhouさんより、それぞれ学位論文の成果を中心にご発表頂きました（写真3）。今後の活躍が期待されます。



写真1 会場の様子



写真2 (左から)山田委員長、竹村先生、関根先生、松永 Chair



写真3 記念品授与式の様子

(左)Changyu Zhouさん、(右)フンクワンクワンさん

【2】 A・P研拡大執行委員会開催

上記一種研の翌日、「ポルファートとやま」でA・P研拡大執行委員会が開催されました。拡大執行委員会委員は、A・P研執行部、各種委員会執行部、AMT研執行部からなる30名ほどの委員会構成です。委員会は春と秋の年に2回開催され、A・P研の運営方針が議論されます。

今度の6月でA・P研委員長が交代となることから、今回は榊原次期委員長を中心とする新体制での運営方針が議論されました。その結果をもとに次回(5月)の各種委員会で具体策が議論され、さらに6月の専門委員会で審議して運営に反映されていくこととなります。このようにして、A・P研の活発な活動が運営されていきます。

【3】 2023年総合大会に参加して

3月7日から10日にかけて、芝浦工業大学で2023年電子情報通信学会総合大会が開催されました。A・P研は1年半ほど前からハイブリッド開催を実施していますが、大会は2019年以来、なんと4年ぶりの現地会場を設けたハイブリッド開催となりました。ハイブリッド開催といっても、発表者および座長は現地参加を原則としており、コロナ前と同じ雰囲気で開催されました。現地での対面発表および質疑は、スムーズなコミュニケーションが可能であり、有意義な情報交換がで

きました。オンラインで参加している方も多数いたのですが、実は、その半数くらいが現地にいる人の接続でした。コロナ前の大会では、大きな会場の後ろの席の聴講者はスクリーンが見えにくかったのですが、現地でノートPCからオンライン接続することにより、手元の共有画面を見ながら対面発表を聞くというスタイルの方が多く見えました。このほうが聴講しやすく、これぞ「Withコロナ」の新しいスタイルと感じました。

【4】副委員長の戯言

◆略語は便利ですが時々困ります。

アンテナ・伝播研究会を「A・P研」と呼んだり、地上デジタル放送を「地デジ」と呼ぶなど、頻繁に使われる用語は略されることがよくあります。これは、頻度の高い用語の長さは短くし、頻度の低い用語は略さずフルスペルとすることで、誤解されることなく文章全体を短くするためです。頻度の低い用語を略してしまうと何のことかわからず改めて説明する必要があり、まるでロック歌手のDAIGOさんのようになってしまいます（これはこれでDAIGOさんの芸風ネタではあるのですが）。

一方、近い領域で同じ略語が使われて混乱を招くことがあります。例えば、RCS (Radar Cross Section: レーダー断面積とRadio Communication System: 無線通信システム)、PMC (Perfect Magnetic Conductor: 完全磁気導体とPropagation Modeling Competition: 電波伝搬モデリングコンペティション)、SAR (Synthetic Aperture Radar: 合成開口レーダーとSpecific Absorption Rate: 比吸収率) などです。どちらを示すか文脈から明らかな場合がほとんどですが、まれに、どちらかわからないこともあります。

◆良いネーミングセンス

物の呼び方の話のついでです。空中に電波を送信したり受信したりする装置は皆さんご存じ「アンテナ」ですが、その語源は昆虫の触角だそうです。まさしく、センシングするために飛び出している形、機能ともに絶妙なネーミングであり、単に形のみを表している「空中線」より適したネーミングセンスと感じます。また、デジタル通信で用いられる直交座標系上のシンボル点配置図を「コンステレーション（星座）」と呼びます。移動受信時のコンステレーションをストレージオシロスコープという装置で観測すると、複数の点がキラキラ輝きながら、ドップラーシフトにより回転します。これがまさしく星座のように見えて、日本語の「信号点配置図」に比べると、これまた絶妙なネーミングセンスと感じます。子供のキラキラネームが問題視された時期がありましたが、絶妙なネーミングは重要だと思います。

◆2回も休んでしまいました。

毎月書くつもり「A・P研からのお知らせ」ですが、1月、2月と2回連続で休んでしまいました。大学の教員というのは1月2月がとてども多忙ですね... と言いつつも訳にはありませんが、

〈問い合わせ先〉

アンテナ・伝播研究専門委員会副委員長（6月より） 藤元美俊（福井大学）

E-mail: ap_ac-chair@mail.ieice.org (AP研執行部のメールアドレス)

AP-NET: A・P研の最新情報を毎月メールにてお届けします!! 登録はA・P研HPにて

A・P研HP: <https://www.ieice.org/cs/ap/>

